

2 組織学的治療効果判定基準*¹⁰

腎癌に対してさまざまな治療を行った場合、抗癌剤や免疫療法剤の種類、投与量、投与方法、治療期間、放射線の質、線量、照射方法、治療期間、温熱療法の加温方法、時間、回数、動脈塞栓療法の塞栓物質の種類、量、回数と塞栓部位、およびこれらの最終治療から手術あるいは剖検までの期間により、癌組織、癌細胞にさまざまな変化と間質反応がみられる。これらの変化ならびに反応の程度によって、下記のように治療効果の程度を分類する。

a. 判定基準分類

Grade 0：無効

癌組織、癌細胞に、治療による変性、壊死などの障害をほとんど認めない場合。

Grade 1：軽度の効果

Grade 1 - a ごく軽度の効果

癌の約1/3未満に癌細胞の変性、壊死、消失あるいは肉芽腫様病変などを認める場合。

Grade 1 - b 軽度の効果

癌の1/3以上2/3未満に癌細胞の変性、壊死、消失あるいは肉芽腫様病変などを認める場合。

Grade 2：かなりの効果

癌の約2/3以上に癌細胞の変性、壊死、消失、肉芽腫様病変ならびに線維化、硝子化、嚢胞化などを認める場合。

Grade 3：著効

癌のすべてに変性、壊死、消失、肉芽腫様病変ならびに線維化、硝子化、嚢胞化などを認める場合。

b. 原発病巣

原発病巣の検索と治療効果判定は、原則として取扱い規約に従って作られた腫瘍の中心を通る最大断面について行う。

c. 転移病巣

転移病巣の検索と治療効果判定は原発巣に準じて行う。

* 10 腎細胞癌，組織学的効果判定基準に準ずる（日泌尿会誌83巻4号，1992）。

① 癌巣中心にみられる変性，壊死，出血，肉芽腫様病変ならびに線維化，硝子化あるいは嚢胞形成などの変化は，非治療例でもしばしばみられる。このような変化で治療効果とみなし得ないときは，癌先進部位における組織学的変化を重要視する。組織切片のみでは効果判定が困難な場合があるので，臨床